

東アジア地域に見られる社会的価値観の共通性に関する考察

ー 台湾と日本のデモとポップカルチャーを主な事例として ー

早稲田大学地域・地域間研究機構 次席研究員

野口 真広

要旨

本稿は、台湾と日本を中心的な対象としつつ、東アジアにおける共通の世界観や公正さへの志向が存在することを、新しいデモとポップカルチャーという共通の土台の存在から分析する。具体的には、近年の東アジアにおける非民主的政治運営や社会的不公正への異議申し立て運動（台湾のひまわり学生運動、香港の雨傘運動、日本の SEALDs が盛り上げた安保反対運動）がなぜ広まったのかを検討する。次に、運動に参加している人々の住む社会で消費されているポップカルチャーが互いの国境を越えて重なり合いつつ共有されていることを論じる。つまり、本稿は、東アジアの新しいデモという政治的行動とポップカルチャーという文化に着目し、それらが社会的・政治的な価値観の共有を促進する基盤となっていることを論じるものである。

キーワード: 台湾、香港、韓国、東アジア共同体、ひまわり学生運動、雨傘運動、SEALDs、ポップカルチャー、デモ、経済格差

1. はじめに

問題設定

本稿は、台湾と日本を主な考察対象としつつ、近年の東アジアにおける市民の社会的・政治的な価値観に共通性が増している可能性を論じるものである。なお、本稿で東アジアというとき、市民の社会的・政治的な分析の対象としては、日本、韓国、台湾、香港に限定している。中国や北朝鮮を含めていない理由は、両国には国政選挙を伴う議会制民主主義と市民社会がないため、両者の関係を考察できないことによる。ただし、国際政治や経済圏として東アジアを語る際には、中国を含めて考える。東アジアでは、社会的・政治的な価値観の広がりを支えるものとして、SNS という新しいメディアの

広まりや、政府の統制の及ばない直接的な対話機会の増大、そして国境を越えたポップカルチャーなどがあると考えられる。娯楽の日常的な共有化により、いわば東アジア版のコスモポリタン文化が広まっていることに注目する。本稿は、それが東アジアに社会的・政治的な価値観の共有を促進する基盤となっている可能性を論じる。

東アジアにおける双方向的な交流の土台には、政治的な民主化と東アジア経済圏（この場合には東アジア共同体構想の東アジアを指す）の拡大がある。1980年代から90年代にかけて、韓国（1987年6月の盧泰愚大統領による大統領の直接選挙制の宣言）と台湾（1996年3月から総統直接選挙実施）を中心に東アジアでは急速な民主化が進んだ。更に中国の経済成長を受けて、東アジア地域の経済的相互依存が進み、そのほかの相互交流も年々拡大している。これは生活者の視点で考えると、相互を対等で親近感のある存在として捉える感覚の広まりにも繋がる土台だと思われる。

その一方で、日中韓の政府レベルでは、領土問題や歴史認識をめぐって時に厳しい対立がみられることも事実である。しかし、2015年11月1日に、約3年半ぶりに日中韓首脳会談が開かれ¹、以後の定例化が確認されている。また同年12月28日に慰安婦問題解決に向けての日韓外相による合意が見られるなど²、各国政府間の対立には小康状態が訪れている。2016年が始まったばかりの現在において、東アジアにおける対外認識は友好的な方向へ向かう好機を迎えているように思われる。

この小康状態が持続的な安定につながるか否かを予測するためには、まず前提として、各国の市民がどの程度近い日常感覚を持っているのかを知る必要がある。隣人として交流するためには、自分と相手の間にどのような共通点と相違点を持っているのかを知る必要がある。共通点と相違点への評価の仕方が、互いの親近感にも大きな影響を持っている。似ていても異なっている、好意を持つこともあれば反感や抵抗感を持つこともある。何に悩み、何を楽しみ、他国のどのような点に興味を持っているのかを、消費するポップカルチャーから推測する。

近年では、国境を越えて様々なポップカルチャーを楽しむ機会が増えている。そこで、本稿では、消費している文化から、ある国の社会的価値観と別の国の社会的価値観の親疎を推測することを試みる。複数の国の市民が、共通のポップカルチャーを共通の文脈で理解しているとき、そこには価値観の共感があると考えられる。本稿では、共通の文脈で消費されているポップカルチャーの存在を検証することで、国境を越えた市民同士が友人となり得る可能性が、すでに東アジアでは広範囲に見られるという仮定の下で分析を進める。

先行研究

先行研究としては、五野井郁夫が日米のデモの比較から戦後日本の民主主義に音楽やアートが果たした役割を分析した論考³や、上ノ原秀晃が日中韓台での面接による社会調査結果から東アジア人アイデンティティの政策的涵養の可能性を論じたもの、そして白石さやが緩やかな東アジア文化共同体をポップカルチャーが促すことを考察したもの⁴、大野俊の越境する東アジアポップカルチャー分析から若者に流動的アイデンティティが見られることを指摘した論考⁵などがある。五野井は、米国のオキュパイ・ウォールストリートで見られた TAZ (Temporary autonomous zone) という一時的な自律的空間に着目し、市民が「院外」政治勢力として政治的な直接意思を示しうる状況の存在を指摘した。五野井はグローバル経済と制度的民主主義の疲弊ともいべき状況が普遍的に見られることを踏まえ、議会内（院内）の政治ではなく議会外（院外）の政治として世界各地のデモを捉える。日本もその一例として、福島原発事故後の反原発デモを中心に分析しているが、その観点はグローバルな院外政治の一環としての評価である。ただし、「60 年安保の時に寸断されなかった「院外」の政治の継続」⁶という視点も持っている。

五野井のグローバルな視点や日本の戦後デモ史の評価に対しては基本的に賛同する。しかし、五野井のデモ評価には、米国のデモをひな型とし、その影響力がハブとして世界各地のデモをスポークと見なすような視点が強いという問題がある。逆に言えば、日本を含むアジア域内の水平的な相互影響関係への視座が弱いという問題である。その結果、60 年代学生運動を論じる際にレベール・ミュージックを取り上げても、ボブ・ディランから語り始めてザ・フォーク・クルセダーズの『イムジン河』を語るというように⁷、音楽でもハブ・アンド・スポークの構図が見られる。

五野井の優れている点は、デモのサウンドトラックとしてプロテストソングに注目していることである。市民が政治に関わる意義は、えてして政策代替案の提示などの有無によって評価されやすい。劉維が、「アドボカシー活動による市民社会組織の参加と制度化—日本、アメリカ、中国を例に—」⁸で論じているように、政治学からすれば、アドボカシー＝政策提言の程度に着目しがちなのはやむを得ない。政策提言ができるのは、いわゆる知識人層といわれる中産階級以上の人々である。しかし、現在の東アジアの社会問題を考える上で、低所得層や学生のような主体にとっての問題意識をいかに政治に反映させるかという大きな課題が現れている。

福島原発後のプロテストソングとして、斉藤和義が歌った『ずっと好きだった』の替え歌である「ずっとウソだった」を評価したのは、同時代感覚のある優れた着眼である。しかし、斉藤和義（1993年「僕の見たビートルズはTVの中」でデビュー）という90年代J-POPミュージシャンの意義を考えると、同世代の日本のポップカルチャーとして浜崎あゆみ（1998年）や宇多田ヒカル（1998年）、安室奈美恵（1992年）、B'z（1988年）などがアジア各国の若者に消費されているという状況は押さえる必要がある。90年代は毎年100万枚を超えるシングルがトップチャートを賑わせていた時代であった。その後、CDの売り上げが落ちていくにしたがって、日本はアジア市場へも進出していった。また、中国や韓国、台湾、香港の各地の音楽業界から見ても、もはやアジアという共通市場は前提となっている。安室奈美恵や浜崎あゆみのような日本では人気のピークを越えたと思われる歌手も、人気絶頂の嵐などと並んで東アジアでのセールは依然として好調である⁹。

そもそも、日本はCDの販売額で言えばアメリカに次ぐ巨大な市場である¹⁰。そのため、K-POPに典型的に見られるように東アジアの歌手も数多く日本デビューしている。日米を中心とした議論の構図からは、このような日本と東アジアとのポップカルチャーの関係は見えてこない。日米安保も原発の問題も、そして日本の憲法改正の議論も、東アジアと日本との関係抜きには議論できない。これに対して、上ノ原や白石、大野は可変的な若者アイデンティティへの評価は別として、可変性という現象そのものと実態としての若者文化のボーダーレス化が起きているということでは一致している。本稿では、ポップカルチャーの共通文脈での消費と社会問題への意識には密接な関連性があると考ええる。

東アジアで民主化を分析する際に、どうしても政策提言や政府批判などに着目して市民の政治性を評価する傾向がある。例えば、山田満¹¹は、『市民社会からみたアジア』という特集号を2012年の国際政治学会で企画した際に、「国家主権の強いアジア地域においても濃淡はあるにせよ確実に民主化や人権を求める市民社会の動きが出てきている」¹²ことに着目した。山田は「民主化の主要な担い手とされる中間層は、経済発展を担保する権威主義体制（開発独裁）の下では経済的な豊かさを享受する保守層に属し、民主化の担い手ではなくむしろ体制維持側にまわるか、政治的問題には無関心層を装うことが指摘されてきた」¹³と指摘する。ここでは行動しない関心層のことを無関心層と考える意識が隠されている。無関心は暗黙の前提として非難の対象となっている。その結果、中間層が崩壊して、一部の富裕層と大量の低所得層に二極化してしまってい

る社会においては、政治的問題に関心を持ちながらも行動する時間も余裕もない人々が非難の対象になってしまう。

かつての労働組合や 60 年代の組織化された学生運動のような、いわば「旧中間層」の運動ではなく、生活のために声をあげる抵抗運動を評価するためには、かつてのデモよりも負担の少なく、幅広い人々に共感されるようなスタイルが求められているのではないだろうか。そこに合致した運動が、台湾や香港、日本、韓国に現れつつあるのではないだろうか。そこで、本研究では、幅広い人々に共感され、時には国境を越えて支援が集まるようなデモが起こる社会的な背景と状況を理解することを目標とした。潜在的なデモ参加者の心情を理解するために、ポップカルチャーの文脈から社会性を読み取り、これまで「無関心」と評価されてきたような未だ組織されていない人々の民意を可視化したい。

まるで連鎖するように東アジアで立て続けに起こった大規模なデモや占拠運動に対して、共通する社会性を読み取ろうという分析は、すでに始まっている。例えば、『季刊変革のアソシエ』19号(2015年1月)では、「躍動するアジアの民衆運動—台湾・タイ・香港・インド・韓国」という特集が組まれているし、これらの事象に関心を持つ論考も増えてきている。台湾、香港、日本のデモについて、コロンビア大学修士の学生でもあり、フリージャーナリスト兼翻訳家の Brian Hioe（丘琦欣）は、2015年11月17日に New Bloom Magazine へ「韓国の最近のデモとアジアの過去の抗議運動」(Current Demonstrations in South Korea and Asia's Past Year of Protests¹⁴) という記事を寄せている。記事の中では、台湾、香港、日本、韓国のデモが同時期に起こったことを分析し、各国の保守政権の権威的な政治運営や愛国主義的教育への抵抗がある一方で中国への危機意識から日韓では保守政権の基盤が強固であることを紹介している。

香港、台湾のデモに中国に対する危機意識が醸成したカウンター・ナショナリズムを見るのは、すでに林泉忠の『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクス—沖縄・台湾・香港』でも指摘されている。林は、台湾と香港のアイデンティティの由来を近代になってから初めて出現した社会現象であると捉える¹⁵。確かに香港と台湾は中国からの政治的圧力を感じている。また、韓国の場合でも北朝鮮との緊張関係がナショナリズムを高めている面は否定できない。しかし、3か国のデモはそもそも民主的な政治運営の在り方についての異議申し立てという面も持っている。詳細は次節に譲るが、すでに民主化した社会を後退させないための民主制度を擁護するデモであることを忘れてはならない。

また、学生自身の体験談や経験談から、近年の東アジアにおける連帯の可能性について考察する論考も数多く見出せる。例えば、早稲田大学に留学し、その後台湾大学大学院に進学した林彦瑜は、早稲田大学アジア研究機構の雑誌『ワセダアジアレビュー』に、「台湾から見る韓国と沖縄」¹⁶と題したエッセイを寄せている。その中で、自らの卒業旅行として沖縄の慰霊碑や韓国の史跡を訪問しながら平和記念教育や愛国主義教育によって国家間のナショナリズムに国民が回収される恐れを指摘し、台湾のための平和的なナショナリズムの在り方を模索している。

以上のように、東アジアにおけるデモと社会の関係についての関心は高まっている。そこで、次に台湾のひまわり学生運動や香港の雨傘運動、日本の SEALDs についての各運動の概要を紹介しつつ、関連する論考を整理したい。

2. 社会的公正の要求と政府批判—東アジアの市民運動—

2. 1 東アジアの市民運動の概要

まず、2014年3月18日から4月10日まで、台湾の立法院を学生たちが選挙した「ひまわり学生運動」については、多くの国々で報道されたこともあり記憶に新しいだろう。なお、ひまわり学生運動（「太陽花学運」）の訳名はいくつかあるが、本稿では以下ひまわり学生運動と称する。2014年5月10日にNHK BS1では『議会占拠 24日間の記録～中台急接近に揺れる台湾～』が放映された。そのほか、雑誌『社会運動』（インスクリプト社）2014年11月号では「新たな対抗運動の可能性—台湾・ひまわり革命」という特集号が組まれるなど、雑誌や新聞でも数多く取り上げられた。台湾の与党国民党の主席でもある馬英九総統は、国会審議も十分に行わずに中台サービス貿易協定の締結を強引に進めようとした。立法院での審議打ち切りを強引に進めた議会運営の非民主制に対して、人々は憤った。

政府は中国と台湾の間での貿易を活性化させるためと説明したが、大陸から押し寄せる低価なサービス業者が押し寄せれば、大半が大三次産業従事者である台湾の市民にとっては死活問題となる。美容師や屋台の商売人など、庶民の生活に直結する政策であるにもかかわらず、馬政権は国民に十分な説明をせず「密室」の議論で進めようとした。市民は「反黒箱服貿」（サービス貿易の議論がブラックボックス状態であること）を拒絶すると言って、政府の非民主的な政治手続きに抗議した。馬総統が民進党の陳水扁政権から政権を奪い返した8年前、中台関係の改善による経済発展が期待されていた。しかし、中国資本や中国市場への依存は、一部の台湾経済人を中台政府の政商として潤す

ことには成功したものの、一般の台湾人を取り込むことができなかった¹⁷。経済成長への期待が失われている中で、新たな中国依存の経済政策が批判されたことは当然の結果であった¹⁸。

港千尋は『革命のつくり方』で、ひまわり学生運動の全体像を描くとともに、世代を超えた台湾の民主運動の流れのなかにひまわり学生運動があることや、アートや音楽を効果的に利用して、感覚的にも世界へアピールできていたことに注目した。政治の理性だけでなく、日常感覚に基づいた政治への不満を議会選挙という行動へ結ぶ付けたことに運動の成功があった。港は「歌、音楽、ファッション、演劇、文学、テレビ番組など、ある世代が感性的に共有しているものが、運動の記憶に結びつく。群衆の記憶は、歴史書の記述として継がれてゆくものではない。感性的な共同体験がなければ、それは残ってゆかないのである。プロテストソングもそのような集団的な記憶をつくる、重要な要素である」¹⁹と、述べる。

ひまわり学生運動では、滅火器というバンドによる「島嶼天光」という歌が運動の中で生まれ、広まった。この歌は、運動の間だけでなく、2016年1月16日の台湾総統選挙でも民進党（最大野党で台湾独立傾向のある政党）の集合場で演奏されていた²⁰。総統選と立法院（国会）議員選挙は同日に実施され、国会議員として時代力量（ひまわり学生運動を母体とする新しい政党）の議員も5人が当選した（議員総数は113名）。

次に香港での雨傘運動を見てみたい。香港では2014年の9月26日から12月15日まで「雨傘運動」が起こった。香港で中心部を学生や市民が占拠した背景には、一国二制度を保証したはずの中国政府が民主化を抑制するような香港行政長官選出方法を導入しようとしたことがある²¹。8月31日に、中国の全国人民代表大会常務委員会は、行政長官の普通選挙に関する決定草案を可決したが、そもそも2人か3人しか立候補できず、しかも1200名の指名委員会の過半数の承認が必要とされた。香港では行政長官は指名委員による間接選挙である。実は指名委員だけでなく、立法会（国会に相当）の議員も、職業団体ごとに委員数・議席数が割り当てられる仕組みになっている。

つまり、職業によって一票の価値が異なるのである。立法会の議席数についていえば、例えば産業界は会社単位、医師や弁護士など専門業種は個人が有権者、労働界を除くすべての業界は各一議席だが、労働界は香港全体で300万人なのに対して、医師の場合は1万人から1人、金融機関は128社から1人の議員を選ぶことができる。ちなみに議員総数は2012年の第五期選挙では70人である。指名委員会の職能別割り当て委員数も同様に一票の格差がある。植民地時代から続く、親中派が多数を占める選挙委員会

が、民主派を候補者に選ぶ可能性はほぼないと言っていいだろう。中国大陆との経済的つながりが強く、社会的に恵まれた階層にとって有利な政治制度になっているといえるだろう。これは裏を返せば中下層の香港人にとっては制度そのものが非民主的であり、社会的公正さへの不満が蓄積させやすい仕組みでもある。多くの若者が香港中心部の占拠運動に参加したのも頷ける。

9月から10月にかけて、主に九龍半島ショッピング街の旺角（モンコック）、香港島の立法・行政機関が集中する金鐘（ガムチョン）、銅鑼湾（コーズウェイ・ベイ）の三か所に占拠が集中した。9月28日には政府ビル広場に突入した学生たちが「愛と平和のオキュパイ・セントラルを正式に開始することを宣言」した²²。雨傘運動の名称は、警察の催涙弾や催涙スプレーから身を守るために雨傘をかざしたことに因む。しばらく警察との対峙が続くが、その後香港政府が占拠を事実上容認したことで、アート作品やモニュメントが立てられ、集会やコンサートが行われるようになった²³。

10月21日には学生団体は香港政府との対話も行われた。学生団体は、一部の富裕層の意向に偏った選挙制度を批判し、低所得者層の意見も反映されるような制度への変更を求めた²⁴。これに関して、梁振英行政長官は、欧米メディアとのインタビューで、「普通選挙制度を導入すれば、月収1800米ドル（約20万円）以下の低中所得者層が選挙を主導することになる」と発言し、物議を醸した²⁵。結局、運動自体は、運動内部の排外主義右翼の反対や、やくざによる襲撃もあって12月15日には占拠は終了させられた。北京政府の非妥協的な態度と、香港財界の指導的立場への固執という二つの敵に挟まれた学生運動は当初から勝ち目のない運動だったのかもしれない。しかし、学生や市民が示した民主主義への民意は重要な旗印として世界に印象付けられた。

日本でも2015年の夏場から安保法制反対のデモをSEALDsが中心となって牽引し、毎週金曜日の国会前デモは社会にも認知された。これをきっかけに、いままでデモに参加したことのない人々が各地でデモを行う機運を盛り上げた。その流れは、2015年8月30日の「戦争させない・9条壊すな！総がかり行動実行委員会」へと繋がった。この日のデモは、主催者側発表では12万人²⁶、警察発表でも3万3千人²⁷という大規模なものだった。日本に関するデモの意義については、次節でも述べるため、ここでは省略する。

デモの連鎖は、この年の暮れには韓国にも及び、11月14日には近年にない10万人規模（主催側推算、警察推算は6万4千人）の大きなデモが実施された。このデモでは放水銃で撃たれた農民が意識不明となる事件も起こった。被害農民への抗議も含めた政

府批判は高まり、12月5日には5万人規模（警察推計1万4千人）の「凡国民大会」と称するデモが起こった。政府は二回目の大規模デモを抑えようとした。参加者は、監視されることへの恐れと抗議のため、思い思いのマスクをかぶって参加した²⁸。あるものは化粧パックのマスクを被ってお肌の手入れ中だと皮肉ってみたり、仮面舞踏会風の目を隠すマスクをかぶったり、あるいは映画『V フォー・ヴェンデッタ』（2006年）の仮面を被るものもいた。

『V フォー・ヴェンデッタ』は、『マトリックス』シリーズのウォシャウスキー兄弟が製作・脚本を担当している。物語は、第三次世界大戦後。近未来のイギリスの社会を舞台に、全体主義の政府を破壊するために暗躍する1人のアナキスト「V」を描いている。現在の朴槿恵政権に対する皮肉がこもっていることは言うまでもない。

デモの背景には、韓国の抱える深刻な社会的公正の問題と経済問題がある。ソウル一極集中による住宅価格の高騰や、長引く不況による若年層の就職難は経済のグローバル化と相まって、よりハイスpek的な学歴と資格試験への競争意識を過剰に高めている。韓国の若者には「三放世代」という言葉があり、恋愛・結婚・出産の3つをあきらめることを指している。今では、これに加えて「住居準備と人間関係」まで加えて五放世代という言葉さえ使われ始めている。いずれも諦める原因は経済的理由が挙げられている²⁹。ごく一部の勝ち組がいる一方で、多くの庶民は将来に期待が持てない。

ハンギョレ経済社会研究院が全国の19歳から34歳までの1500人を対象に行った「青年意識調査」によると、「韓国社会は努力に応じた公平な対価が支払われる」との回答が13.9%、「公正な対価が支払われていない」という回答が86.1%となった。また、「社会的な成功において親の経済的地位よりも自分の努力の方が重要だ」との回答は27.3%にとどまった一方、「親の経済的地位の方がより重要だ」との回答が72.7%に達している³⁰。韓国は、台湾、香港、日本と比べてもいっそう社会的な苦悩が深いように見られる。

2. 2 現象としてのデモの連鎖

世界のなかの東アジアのデモ

五野井が指摘しているように、アラブの春から始まり、オキュパイ・ウォールストリートでTAZは見本となった。世界経済の中心である米国のウォールストリートを占拠するという象徴性は、立法院を占拠した台湾のひまわり学生運動や香港の経済・政治の中心地を占拠した雨傘運動、そして国会前デモを行ったSEALDsとも共通する。いず

れもグローバル経済が引き起こした格差問題への異議申し立てという共通項を持っている。連鎖という点で見れば、ひまわり学生運動のリーダーである林飛帆は、香港の学生たちと立法院占拠中も連絡を取り合っていると話している³¹。また、早稲田大学留学生の林彦瑜（現在、台湾大学修士課程）は、ひまわり学生運動関係者とともに SEALDs 参加学生と勉強会を行っている。そのほか、台湾中央研究院の呉叡人副研究員（国民党独裁体制への批判運動である野百合運動の元運動家）は、学生達と一緒に立法院へ入って支援するだけでなく、香港大學學生會學苑『香港民族論』（學苑 2014）の中で、「小人の夢：香港ナショナリズムノートの考察」（原題「The Lilliputian Dream：關於香港民族主義的思考筆記」）³²を寄稿して香港の学生を励ましている。

他にも、You Tube や Facebook で各運動の映像や書き込みを見ると、東アジアの国境を越えて運動へのコメントを書き込み人々がいることが分かる。例えば、台湾のひまわり学生運動のプロテストソングを歌った滅火器の「島嶼天光」の You Tube 映像を例にすれば、日本語訳された歌詞付きの映像には多数の日本語の書き込みがついているものがある³³。その中には「デモの参加者は 50 万人以上だとか。それでゴミもほとんど無かったというのだから、称賛に値する。すでに長期戦の様相を呈しているようで先は未だ不透明だが、日本そして世界があなた方の勇気と覚悟ある行動を支持し、見守っている。台湾、加油!」という書き込みがあった。これに対して、映像をアップしたユーザーから「見守ってくださってありがとうございます。リーダーの学生さんたちは、とても優秀で勇敢な方々です。長期戦も覚悟していると思います。台湾が真の民主・法治国家になるため、頑張っていきます。これからもどうぞよろしくお願いします。」という返信が付いているものもある（2014 年の応答）。このほか、いくつかのビデオクリップ映像を見ていくと、韓国人も台湾を支持しますとか、香港人も台湾を支持しますという書き込みも見つけることができる³⁴。デモ体験がテーマソングとともに国境を越えて共有されているといえるだろう。

3. 東アジアの共通性 — 社会問題への共感の可能性

3. 1 置かれている状況の類似性とポップカルチャーの周流

では、なぜ東アジアのデモは国境を越えて共感されるのだろうか。そこには人々を取り囲む社会問題が影響していると考えられる。経済格差、若者の就職難、晩婚化、戦争の記憶の再解釈をめぐる国内論争など、実は東アジアでは共通の社会現象を指摘することができる。

台湾の馬英九総統、韓国の朴槿恵大統領、日本の安倍晋三首相はそろって保守政権であり、歴史認識においても保守的であることは共通している。これに対して、各国の若者は自分なりの考えで歴史を解釈しなおそうとしている。それは左右どちらか一方の歴史観に向かっているというよりも、政府からの押し付けに対する反発といった方が良い。日本の SEALDs の中心メンバーである奥田愛基は典型的な例だが、政府の保守的な戦前再評価の傾向に違和感を持ち、元戦犯との対話から戦前の歴史を自分なりに解釈しようとする。奥田は、元 BC 級戦犯だった飯田進の話を高校 2 年の時に平和授業で聞いている。「戦争で人命を奪った過去を明かし、『二度と繰り返すな』と訴えた」ことを思い出しながら国会前のデモに参加していると奥田は語る³⁵。

もう一人の SEALDs メンバーである千葉泰真は、新聞投稿に載った元特攻隊の予科練として生き延びた老人の言葉を紹介しながら国会前のデモ演説を行った。千葉は読み上げる。

「安保法案が衆院を通過し、耐えられない思いでいる。だが学生さんたちが反対のデモを始めたとき、特攻隊を目指す元予科練だった私は、うれしくて涙を流した。（中略）天皇を神とする軍国で、貧しい思考力しかないままに、死ぬと命じられて爆弾もろとも敵艦に突っ込んでいった特攻隊員たち。人生には心からの笑いがあり、友情と恋があふれ咲いていることすら知らず、五体爆裂し肉片となって恨み死にした。16 歳、18 歳、20 歳……。若かった我々が、生まれ変わってデモ隊となって並んでいるように感じた。学生さんたちに心から感謝する。今のあなた方のようにこそ、我々は生きていたかったのだ」³⁶。

元特攻隊の老人の投書からは、当時の自分たちと同じ年齢の若者がデモに立ち上がっていることに希望を持ち、あったかもしれない自分たちの選択肢を実現させてくれるという感謝の気持ちが伝わってくる。同時に、その気持ちに千葉が共感していることもよく分かる。

彼らの発言を聞くと、お仕着せの歴史認識から自由であるという印象を強く受ける。これは物心ついた時から、冷戦後であり、台湾や韓国が民主化されているのが当たり前の世代ならではの感覚なのかもしれない。そもそも彼らの世代は、東アジア諸国の若者と同じ目線で会話し、共通の音楽やアニメ、食生活で盛り上がり、クラスメートとして大学生活を過ごし、アルバイト先では同僚となり、中には恋愛対象としても互いを意識

することが珍しくもない。当然、まず謝罪ありきでもなく、日本賛美でもなく、自分が納得する形で歴史を考えようとするのが自然な人々なのだろう。そこに、戦前世代は本当の対話ができる世代の登場を見出して歓迎しているように思える。

東アジアのデモをリードする中心人物を比較してみると、その若さと年齢の近さに驚く。日本：奥田愛基 当時 21 歳、台湾：林飛帆 当時 25 歳、香港：ジョシュア・ウォン（黄之鋒）当時 18 歳。彼らは東アジアの社会で互いを対等な視線で見つめ、互いの「生きづらさ」から来る感傷と怒りへの共感ができる世代である。

各国のデモのプロテストソングを以下に比較してみたい。日本では反原発の歌として、斉藤和義「ずっと好きだった」の替え歌「ずっとウソだった」（2011 年）のほか、SEALDs がロズさんでいた「民主主義って何だ?」「これだ」というコールアンドレスポンスも広く知られるようになった。台湾では、すでに You tube での各国の書き込みの例で紹介した滅火器「島嶼天光」（2015 年）がある。香港では、「撐起雨傘」（雨傘を掲げよう）という曲が作られているが、このほかにデモの定番曲となっている BEYOND の「海闊天空」（日本でもデビューしているため、同曲は日本語訳の「遥かなる夢に ～Far Away～」もある）を挙げたい。なぜならば、BEYOND はボーカルが日本デビュー後に事故死しているが、今でも香港では人気のあるバンドであり、台湾の張恵妹（アーメイ）という歌手の香港公演でもカバーされている曲である。いずれの曲も自分の力の弱さと社会的な不公正への怒りをにじませた哀調の曲という点が似ている。

韓国については最近のヒット曲のなかではプロテストソングは見当たらないが、民主化後の 90 年代にはソ・テジという社会的メッセージ性を持った人気歌手もいる。最近でも DJ DOC という政治的なメッセージを送るヒップホップグループはいるが、韓流と言えば、少女時代や東方神起、BIGBANG などのスタイリッシュなダンスグループ系の K-POP が中心となる。いまでも韓国でデモの時に流れされるのは「임을 위한 행진곡」（あなたのための行進曲）という 1980 年の光州事件で亡くなった人々への哀悼歌である³⁷。光州事件とは、軍事クーデターを指揮した全斗煥へ抵抗した市民への弾圧した事件である。「임을 위한 행진곡」は、2002 年のワールドカップでも韓国チームの応援歌として使われている。最近の K-POP がプロテストソングにならないのは、デモを担う層があまり若返っていないことも影響しているのかもしれない。

プロテストソングが、流行曲となるのは、各国の中での話としては珍しいことではない。しかし、興味深いのは、プロテストソングの曲の作り手が、60 年代の日本のフォークミュージシャンとは違って、様々な流行曲の作り手にたいして優越感を持つことな

く、あくまでも音楽としての楽しさを失っていないという点である。ファンからしてみれば、運動のための音楽を聴かされているような堅苦しもなく、純粋に音楽性に惹かれて聞くこともできるし、政治性に惹かれるものもいるというように、多様な聞き手と同居することができる。

昨今の音楽業界では、コラボやフィーチャリングといった異なるレーベルやジャンルのアーティストが組むことは珍しくなく、さらにはフェス形式のライブへの参加を通じて多彩な音楽ジャンルのファンに触れる機会も多い。ましてや国境を越えてのワールドツアーというライブ形式は、東アジアの音楽市場での売り上げを上げるためにも必要になっている。それが各国の社会派のバンドや歌手からの触発作用を起こすこともある。

例えば、日本のバンドにアジアカンファ・ジェネレーションという人気バンドがいる。彼らは自身が主催する NANO-MUGEN FES をはじめ、多くのフェス形式のライブに参加している。フェスでは、ミュージシャンが順番に数曲ずつ歌うため、ファンにとっても出演者にとっても異なる音楽性が出会う場になる。2007 年には初の海外公演として韓国の野外フェス「INCHEON PENTAPORT ROCK FESTIVAL」へも参加している³⁸。その後、韓国へは定期的に公演に出かけ、2012 年には単独で台湾公演を、2013 年には「アジアサーキット」というイベントで台湾、韓国、シンガポールなどで公演をしている³⁹。日本だけでなく、アジアのファンへ向けても公演を続けるなかで、国際的な政治に関心も深まり、ライブ会場での MC の時やラジオ放送、雑誌のインタビューなどで政治的な意見を述べることも多い。

後藤は、『SELDs 民主主義ってこれだ！』（大月書店）の中で、SEALDs の活動に賛同してメッセージを送っている⁴⁰。後藤は『Rolling Stone』という音楽雑誌のインタビューでも政治と音楽について語っている。彼は、今の世の中を「公正」ではないと率直に批判する。「生まれながらにチャンスが不平等だということに関しては憤ってる。金持ちの家のヤツだけが高等な教育を受けられるなんて、不平等だよ。⁴¹」という言葉からは、彼らのファンの中にもいるであろう不遇な若い世代への共感がある。後藤は、共感ということについて語りながら、なぜミュージシャンである自分が政治を語るのかについて、非常に興味深い発言をしている。

「バンドでもの作りをするのは、そこに小さな社会を立ち上げるということだから。調和したいんだよね。鳴らしている音が気持ちよく響くようにしたい。……ミュージシャンとかが理想を語ったりするのは、そういう瞬間を知っているからかもしれ

ない。複数の人たちで集まって、ひとつの目的に向かって何かが成し遂げられた時の幸福を知ってるから。……」⁴²

後藤の言葉は、音楽には人と人をつなぐ力があることを教えてくれる。そして、誠実なミュージシャンにとって、ファンを幸せにするためなら、その手段が音楽だけでなく政治的な行動というものもあり得ることを教えてくれる。次に実際に政治家になった台湾のミュージシャンの例を取り上げたい。

台湾の音楽と政治を語る際には、メタルバンド「ソニック」(ChthoniC、閃靈)は欠かせない。2016年1月16日の立法院選挙に立候補したボーカルのフレディ・リム(林昶佐)は新党の時代力量から出馬して当選した。ソニックは、霧社事件や第二次世界大戦、二・二八事件などの政治的なテーマを基に曲を作る社会派のメタルバンドのリーダーである。二・二八事件で引き裂かれた夫婦の悲恋を歌った「暮沉武徳殿」(「Defender of Bu-Tik Palace」)や、日本軍人として戦地へ送られた高砂義勇兵(台湾先住民からなる兵士)を歌った「TAKAO」などで知られている。国民党を痛烈に批判する台湾独立派でもある。1998年にデビューした後、2000年にフジロックフェスティバルで来日してから定期的に公演で訪日している⁴³。「暮沉武徳殿」(「Defender of Bu-Tik Palace」)のアコースティック版では「ワダツミの木」で有名な元ちとせとコラボレーションしている⁴⁴。「暮沉武徳殿」のMVでは、大東亜戦争から夫は生還したものの、帰郷後に起きた二・二八事件という国民党政府による武力弾圧で殺される。しかし、遺された妻は半世紀後にソニックの歌声が響く舞台の中で再び夫の姿を見つけて涙するという映像となっている⁴⁵。

台湾では、ソニックのMVに限らず、台湾の甲子園球児を描いた映画『KANO』(2014年公開)や、日本時代に恋人であった日本人教師を慕い続ける台湾人女性の話を描いた『海角七号』(2008年公開)のように、生活者として台湾人が懸命に生きた時代として過去を振り返ろうとする傾向が見られる。これは、政府視点での公的な歴史観というよりも、現代の台湾人が自分たちの主体的な人生を過去にも投影している面が強い。霧社事件という横暴な日本人警察官への反感から起こった日本人虐殺事件である霧社事件を描いた『セデック・バレ』(2012年公開)もまた、そのような等身大の日本人を描くという点では、基本的な日本観としては通じるものがある。なお、これらの映画は日本でも上映されている。日台の間では特に顕著であるが、若い世代の歴史観の中立化や、相互を対等な視線で見るといった感覚が文化理解にも見出すことができる。

3. 2 共有される文化の特徴

共有される文化の存在

若者が触媒となり東アジア社会での文化や価値観の共有を進めていく上で、もちろん、漢字文化圏、あるいは儒教文化圏など様々な伝統文化の基盤も活用されている。しかし、東アジアでは、戦後、米国のポップカルチャーが流通しており、それが共通基盤となつて、日本、韓国、台湾、香港のポップカルチャーが流入するような形になっている面も大きい。冷戦時代には、日韓台は米国のハブ・アンド・スポークの一軸となり、経済だけでなく若者文化的にとっても共通の市場であった。その共通の市場が確立した後に、日本のアニメや、音楽、映画が後続の売り手として進出し、同様に、香港のカンフー映画（ジャッキーチェンなど）や韓流ドラマ（『冬のソナタ』など）や K-POP（東方神起、少女時代、KARA など）、華流 C-POP（アーメイ、周傑倫、Mayday）などが続々と参入していった。最近では、2016 年の台湾総統選挙で話題になった韓国のアイドルグループである TWICE のように、日韓台の出身者からなるアイドルグループも存在する。【表 2】は、日台の歌手・バンドによる合作の一例である。

【表 2】日台の歌手による合作

歌手またはグループ名	コラボ曲名
flumpool(日)、Mayday(台)	「Belief ～春を待つ君へ～」
GLAY(日)、Mayday(台)	「Dancin' Dancin' feat.TERU(GLAY)」
安室奈美恵(日)と蔡依林(台)	「I'm Not Yours (feat. Namie Amuro)」
ソニック(台)、元ちとせ	「Defender of Bu-Tik Palace」
EXILE の ATSUSHI(日)、周傑倫(台)	「説了再見」(2012 年)

TWICE は、2016 年 1 月 16 日の台湾総統選挙の際に、メンバーの一人である台湾人の周子瑜（通称ツウィ）が政治的な騒動に巻き込まれたことでも有名になった。韓国の音楽業界にとっては、中国市場も日本市場も欠かせない。そこで、2015 年にデビューした女子 9 人組の TWICE は、メンバーに韓国出身 5 人のほか、日本出身 3 人、台湾出身のツウィからなる多国籍アイドルとして売り出された。あるテレビ番組でメンバーがそれぞれの出身地の国旗を振るシーンがあり、ツウィは中華民国旗を振った。それが中国のネットで台湾独立派のアイドルであるという批判を招いてしまい、1 月 14 日には所属事務所がツウィの謝罪する姿を動画で公開して中国に謝罪した。騒動は瞬間に日韓台で報道された。謝罪するツウィの憔悴しきった姿は痛々しく、かえって台湾独

立支持派の若者が民進党へ投票する流れを後押ししたとも言われる⁴⁶。これは東アジア地域でポップカルチャーが一つの市場になっているからこそこの現象であった。

次に日本がアジア市場で強みを持っているポップカルチャーを考察したい。日本と言えば何といってもアニメとマンガだろう。ドラえもんや、ガンダム、スタジオジブリの作品などはアジアに限らず世界中で愛好されている。韓国でも台湾でも日本のアニメは人気があり、鳥山明の『ドラゴンボール』や、尾田栄一郎の『ONE PIECE』などは誰でも知っている。ただし、ここで注目したいのは、韓国での『進撃の巨人』の社会的なブームである。その過熱ぶりは日本でも報道されている。

生きづらさへの共感

諫山創の『進撃の巨人』（講談社『別冊少年マガジン』2009－2016 年現在連載中）は、三重の城壁に囲われた城郭都市に住む人間と、不意に人間を襲撃する人食い巨人との戦いを描いた無国籍的な世界でのアクション漫画である⁴⁷。この世界では、最も安全な中心の内壁の奥に住む政治家や富裕層と、巨人に襲われやすい外壁のすぐ内側に住む庶民との社会的格差が厳然としてある。城壁の外は巨人がうろつく危険な世界であり、偵察隊の役目を果たす若い兵士たち（調査兵团と呼ばれる偵察兵）を除いて、誰も外へ出ようとはしない。ガス噴出のできる立体機動装置と呼ばれる装置によって、兵士は宙を舞うように跳躍できる。巨人の首筋にある弱点を剣で切り裂くことで、巨人は仕留めることができる。数メートルから数十メートルに及ぶものまで、巨人は体の大きさだけでなく俊敏さや知能にも差がある。運悪く強力な巨人に出会えば、百戦錬磨の兵士もあっという間に殺され、食われてしまう。誰がいつ何時に食われて死ぬのか分からない恐怖に襲われながら、兵士たちは戦い続ける。救いようのない不条理さが際立つ漫画だが、連載後すぐに爆発的な人気を誇り、『このマンガがすごい！ 2011』の「オトコ編第1位」となっている⁴⁸。

2013年6月6日の『日経ビジネスオンライン』では、趙章恩が『『巨人』が住む世界は、『有錢無罪、無錢有罪』の韓国社会を象徴？』という記事を書いている。趙は韓国の評論家の意見をまとめながら以下のようにブームの背景を分析している。

韓国では、ウォンを安くして、輸出をメインの事業とする大手企業の利益を優先する経済政策をとった。大手企業が史上最大の利益を上げても、落水効果（大手企業が利益を上げた時に、下請け企業や社員にもおこぼれで利益が回る効果）

はない。ボーナスも増えないし、雇用も拡大しない。食糧や資源を輸入に頼る韓国では、輸入物価が高騰し、庶民の暮らしは厳しくなった。

アニメに登場する王政府と同様に、韓国で社会指導層と呼ばれる人たちやお金持ちの生活も脅かされることはない。これに対して“外側の壁に住む”お金のない庶民はますます貧乏になり、この時代に餓死する人がいるほどである⁴⁹。

韓国における雇用不安や経済格差の問題は深刻である。また、韓国では社会指導層の問題には世代間格差の問題も含まれている。2012年の大統領選を競った与党セヌリ党の朴槿恵と革新系野党の文在寅の選挙では、焦点の一つとして世代間対立があった。就職難に対して不満を持つ若年層と、老後の不十分な年金政策への不安を感じる中高年層との投票行動には、はっきりとした違いが出た。出口調査⁵⁰によれば、20代から30代の投票先は朴槿恵に対して30%台前半であり、文在寅には60%台後半だった。40代は44%対55%、50代から60代は60～70%対40～30%であったという。投票率は75.8%と過去二回を上回る高さだった。若者は、社会の勝ち組になるために、良い大学に入り、一流企業や高級官僚になることを自身も家族も期待する。

しかし、有名塾が集まるソウル市江南地区の子どもたちが有名大学に入るという事実から見ても、努力する前に努力できるだけの経済力が親にあるのかどうかという問題もある。もし経済力があっても、就職に失敗すれば、失望や不満は家族ぐるみで増幅される。正規職に就けず、やむを得ず非正規職に就くか、あるいは大学院進学や留学をして見栄えの良い経歴を増やす若者もいる。このように就職対策として経歴を積み重ねることを「スペック管理」という。所得格差が学力格差を生み、それが新たな所得格差を生むため、若者たちの抱えるストレスは深刻である⁵¹。

成功願望への信仰は、逆に言えば非成功者への蔑視も生む。ある団地の警備員をしていた男性が住人から心無い侮蔑の言葉を受けて、ついには焼身自殺するという事件が起こった。記事⁵²によれば、警備員の男性は「ある若い母親が自身が近付けば蔑視するような眼差し」で見つめ、「ああ！うちの子供たち、一生懸命勉強しなければ。そうしないとあのおじさんのようになってしまう」という言葉を投げかけたという。

他にも格差と学歴社会の問題を示す流行語がある。「スプーン階級論」という言葉である。これは「親が持っている富の水準が子供の人生を決定づける」という考え方だ⁵³。Born with a silver spoon in one's mouth.という英語の慣用句をもじった言葉である。日本でも貧困の世代間連鎖が生まれていると指摘されているが⁵⁴、韓国でも同様のこ

とが起きている。不遇な若者を取り囲む閉塞感があるからこそ、韓国での社会現象的な『進撃の巨人』人気が起きているのだろう。

ちなみに、世紀末的な設定であり、韓国でも評価されているマンガという点で共通するものに、奥浩哉の『GANTZ』（集英社『ヤングジャンプ』2000－2013年連載）がある⁵⁵。このマンガは、一度死んだ人間を再生する GANTZ と呼ばれる未知の球体装置に召還されて再生された人間が、特殊なスーツと武器で超人的な能力を身に付け、異星人と果てしない戦闘を繰り返すアクションマンガである。死んだ後に再生されたということ以外には何の共通点もない、世代も性別も国籍も異なる人々が、目的も知らされず、急に戦闘の場所へと転送される。敵を倒すかあるいは GANTZ の決めた戦闘時間が終わるまでは異星人との闘いを強いられる。これが何度も続く。あるものは生死の狭間で戦う内に却って生きている実感を覚え、日常生活よりも GANTZ の召還する戦場を期待するようになる。それでも、非情なまでに強力な敵が際限なく登場し、避けようのないだろう死の予感に打ちのめされることになる。不条理な現実には翻弄される若者が主人公であるという点で、『進撃の巨人』と『GANTZ』は非常に近い世界観を持っている。

『GANTZ』は 2011 年に前後編の 2 部作で実写化され、主人公である玄野圭を二宮和也が演じ、主人公の友人であり強力な仲間でもある加藤勝を松山ケンイチが演じている。韓国では、まず第 15 回プチョン国際ファンタスティック映画祭で上映された。その時に発売されたチケットは 1 分 56 秒で完売し、同映画祭上映作品の中での最短時間記録を樹立している⁵⁶。その後、韓国でも公開されている。

閉塞感の裏返しとして、成功者や上流階級への憧れを描いている作品の例としては、韓日台でそれぞれドラマ化された『美男ですね』や、台日韓中でドラマ化された『花より男子』がある。前者は韓国発のドラマがリメイクされたものであり、後者は日本のマンガを基に最初に台湾でドラマ化され、次々に火が着いて各国でリメイクされた。『花より男子』は、神尾葉子による日本の少女漫画。『マーガレット』（集英社）で 1992 年から 2004 年まで連載された。裕福な生徒の多い学園に入学した貧乏少女の牧野つくしが前向きに学園生活を送り、大金持ちの男子グループ「F4」と呼ばれる花の 4 人組（F4 はフラワー 4 の略）からのいじめにもめげずに次第に F4 の価値観さえも庶民的な公正さへと導いてしまうという話である。経済的な差別によるいじめにヒロインが敢然と立ち向かう爽快さもあり、高すぎる経済力や逆につくしの貧乏暮らしさえも清貧さとして時に好意的に時にギャグとして笑い飛ばしている。

ちなみに日本版の『花より男子』で花沢類役を演じた小栗旬は、のちに実写版『ルパ

ン三世』でルパンを演じた。同作には、台湾版『花より男子』である『流星花園』で道明寺司を演じたジェリーのほか、韓国版の『花より男子』である『Boys Over Flowers』で美作あきらを演じたキム・ジュンも出演しており、アジア各国の『花より男子』役者が集っている⁵⁷。アジアでの興行を意識した結果の配役だと思われるが、『花より男子』の出演者が揃ったことは、同作品がアジアで愛されていることを証明している。

『進撃の巨人』と『花より男子』は、作風自体は全く異なるが、若者が理不尽な世界に突然投げ込まれ、そこで懸命に生きていくことを強いられているという点では実は共通の構造を持っている。そして、日本だけでなくアジア各国で受け入れられているという点でも同じである。東アジアの人々は、それが日本発であるか否かを問わず、共感するストーリーと世界観であるからこそ、上記の作品に惹かれていると考えられる。

4. おわりに

東アジアでは SNS サービスが、各国内の社会での標準的なツールになり、それがコミュニケーションや社会のつながり方に大きな影響を持ち始めている。元々、LINE や Facebook のような SNS は、実は設定によっては匿名性を高めることが可能なので、限定された「身内のネットワーク」ツールとして使うこともできる。このような使い方は日本ではめずらしくない。実名公開が前提の Facebook よりも匿名性が高い mixi が最初に流行ったことにも表れている。しかし、それでは社会への異議申し立ては広がりづらい。ここに、デモへの参加というインパクトが加わった。現実の場でのコミュニケーションが起これと、閉じた「身内のネットワーク」から、開かれた「ネットワーク」のためにツールを使いなおそうという気分が生まれる。

国会前安保デモの影響が急速に広まったのは、自分たちの置かれた状況に対する不満や不公正感への共感が広がっていたからである。互いに似たような不遇感を持ち、親近感を持ちやすいことに若者は気づいたのである。これは、東アジア規模にも広がる共感の輪である。文脈まで含めたポップカルチャーの共有化は基盤となっており、ひまわり学生運動や香港の雨傘運動などへの東アジア大の関心の深まりを招くことができている。

ただし、東アジアは国家の枠で区切られた地域の集まりである。EU のような地域機構を持っていない。いまだに南北朝鮮は休戦状態に過ぎないし、中台関係も潜在的な軍事衝突の可能性は残っている。しかし、それでも経済的にも文化的にも共同体としての基盤を持ちつつある。張寅性は「公正さ」が東アジアの国際社会では「もっとも有力な準拠」であり、東アジア共同体は「東アジアの人々の地域生活で実感をもって抱かれる

とき、共同善への意思を強める規制的理念として働くはず」⁵⁸であると述べている。

ポップカルチャーの文脈を社会的な視点から解釈してみると、不公正や不平等などの社会的な悪への反感は少なくとも共感されている。そして、「共同善」への志向についても萌芽は見られる。『進撃の巨人』の主人公であるエレンが「世界の残酷さに」立ち向かおうと行動する時、彼が示す「公正さ」は旗印となって仲間が集まっていく。それは『花より男子』のヒロインであるつくしが、最初は敵対していたF4の花沢類を感化させ、富裕層と庶民の価値観の壁を壊したことに似ている。近年におけるアジアのデモとポップカルチャーの隆盛は、「公正さ」という旗印の土台になる可能性がある。その旗の下に地域横断的な連帯が生まれることも可能性としてはあり得るのではないだろうか。

【付記】本論文は2015年度科学研究費補助金（課題番号：15H01933）による研究成果の一部である。

1 「日中韓首脳会談、再び定例化へ FTA加速を確認」『朝日新聞』（2015年11月2日）。

2 「日韓外相の共同発表 慰安婦問題合意」『朝日新聞』（2015年12月29日）。

3 五野井郁夫『「デモ」とは何か 変貌する直接民主主義』（NHK出版 2012）。

4 白石さや「ポピュラーカルチャーと東アジア」西川潤・平野健一郎編『国際移動と社会変容』（東アジア共同体の構築3）（岩波書店 2007）pp.203-226。

5 大野俊「越境するポップカルチャーと「東アジア人」アイデンティティ」『九州大学アジア総合政策センター紀要』2、（九州大学アジア総合政策センター 2007）pp.93-101。

6 五野井前掲書、p.209。

7 五野井前掲書、pp.91-92。

8 劉維が、「アドボカシー活動による市民社会組織の参加と制度化—日本、アメリカ、中国を例に—」『国際日本研究』vol.7（筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻 2015）。

9 「安室奈美恵、アジア5ヶ国・地域でアルバムNo.1 日本人女性アーティスト初の快挙」（2010年1月27日）<http://www.oricon.co.jp/news/72798/full/>。「アルバム売り上げ不振の浜崎あゆみ、アジア諸国ではまだまだ人気！」（メンズサイゾー 2015年5月1日）。

http://www.menscyzo.com/2015/05/post_9745.html。2016年2月23日検索。

10 Richard Smirke"IFPI Music Report 2014: Global Recorded Music Revenues Fall 4%, Streaming and Subs Hit \$1 Billion", 2016年2月26日検索。

<http://www.billboard.com/biz/articles/news/global/5937645/ifpi-music-report-2014-global-recorded-music-revenues-fall-4>。2016年2月26日検索。

11 山田満「序論 市民社会からみたアジア」『市民社会からみたアジア』（国際政治学会 2012年）。

¹² 同上論文、p3。

¹³ 同上。

¹⁴ <https://newbloommag.net/2015/11/17/south-korea-protests-november/>。2015 年 11 月 20 日検索。

¹⁵ 林泉忠『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティックスー沖縄・台湾・香港』（明石書店 2005 年）p.292。

¹⁶ 林彦瑜『ワセダアジアレビュー』17 号、（めこん社 2015 年）。

¹⁷ 松本充豊「台湾の民意をめぐる「兩岸三党」政治」『東亜』（2015 年）pp25-26。

¹⁸ 池上寛「馬英九政権下の台湾経済」『東亜』571（霞山会 2015 年 1 月）p.43。

¹⁹ 港千尋『革命のつくり方 台湾ひまわり運動—対抗運動の創造性』（インスクリプト 2014 年）、pp75-77。

²⁰ 著者は 2016 年 1 月 15 日の民進党候補者の蔡英文の総統府前集会で聞いている。

²¹ 早野一「解説：雨傘運動の底流—近年における香港の民主化運動」區龍宇『香港雨傘運動』（柘植書房新社 2015 年）。以下の香港の選挙の仕組は、pp.335-338。

²² 「佔領中環 正式啟動」『和平佔中新聞稿』2014 年 9 月 28 日、

http://oclp.hk/index.php?route=occupy/activity_detail&activity_id=96 2015 年 11 月 20 日検索。

²³ 早野前掲論文、p.343。

²⁴ 中園和仁「視点・論点 「香港 民主化運動の背景とその意味」」NHK、2014 年 11 月 11 日。

<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/203232.html>。2016 年 2 月 26 日検索。

²⁵ “Hong Kong Leader Warns Poor Would Sway Vote”，2014 年 10 月 21 日、

<http://www.wsj.com/articles/hong-kong-leader-sticks-to-election-position-ahead-of-talks-1413817975>。2016 年 2 月 26 日検索。

²⁶ 「社会は変わる、信じた 1 年 SEALDs など今年最後のデモ」『朝日新聞』（2015 年 12 月 7 日）。

²⁷ 「安法案反対デモ、本当の参加者数を本社が試算」『産経新聞』（2015 年 8 月 31 日）。

²⁸ 「ソウルの第 2 次総決起大会、警察“車壁”がなくなり平和が戻る」『ハンギョレ新聞』、2015 年 12 月 5 日、<http://japan.hani.co.kr/arti/politics/22702.html>。「[社説]韓国の民主主義をまっとうした平和デモ」『ハンギョレ新聞』、

<http://japan.hani.co.kr/arti/opinion/22717.html>。2015 年 12 月 7 日。2016 年 2 月 20 日検索。

²⁹ 「韓国 20 代から 30 代の 58%が「私も 5 放棄世代!」」『ハンギョレ』2015 年 3 月 3 日。

<http://japan.hani.co.kr/arti/politics/19839.html>。2015 年 12 月 7 日。2016 年 2 月 20 日検索。

³⁰ 「韓国の若者 10 人のうち 7 人「一度失敗したら立ち上がれない」」『ハンギョレ新聞』、2015 年 8 月 19 日。<http://japan.hani.co.kr/arti/politics/21661.html>。2015 年 11 月 23 日検索。

³¹ 福島香織『SEALDs と東アジア若者デモってなんだ!』（イースト・プレス 2016）p.106。

³² 吳敏人「The Lilliputian Dream：關於香港民族主義的思考筆記」『香港民族論』（香港大學學生會 2014 年 8 月）pp.65-88。<http://whogovernstw.org/2014/08/08/rweirenwu1/>に転載。2015 年 12 月 7 日検索。

³³ lingoken「[島嶼天光]（この島の夜明け）日本語字幕版～台湾ヒマワリ学生運動主題歌～」

<http://www.youtube.com>。2016 年 2 月 14 日検索。

³⁴ Wu Darkuen「〈島嶼天光〉（Island's Sunrise）藝術公民計劃 太陽花運動歌曲」

<http://www.youtube.com>。2016 年 2 月 14 日検索。

³⁵ 「原点は元戦犯との出会い 安法案制反対、声上げる大学生」『朝日新聞』2015 年 7 月 13 日。

³⁶ 千葉泰真「2015.07.31」『SEALDs 民主主義ってこれだ!』（大月書店 2015）pp.14-15。

³⁷ 韓国におけるデモのテーマソングについては、高麗大学修士課程のアン・ドヒョンさん、早稲

田大学アジア太平洋研究科満期退学の関淑さんにご教示頂いた。

38 ASIAN KUNG-FU GENERATION の公式 HP。http://www.asiankung-fu.com/history/。

39 「後藤正文 (ASIAN KUNG-FU GENERATION) × ホリエアツシ (ストレイテナー) スペシャル対談」http://www.m-on-music.jp/0000090132/。2016 年 2 月 26 日検索。

40 SEALDs『SEALDs 民主主義ってこれだ!』(大月書店 2015) p.28。

41 後藤正文「みんな音楽を鳴らすように生きられたらいい」『Rolling Stone』(2015 年 7 月)p.33。

42 同上書、p.34。

43 ソニック公式 HP。http://www.chthonic.tw/2009/ch/index2015.php。2016 年 2 月 26 日検索。

44 CHTHONIC『Timeless Sentence』(ハウリング・ブル・エンター 2015)。

45 Defenders of Bu-Tik Palace の MV、http://chthonictw.tumblr.com/post/106606940713/。

46 呉豪人「たかが国家、されど国家：国家なき国家台湾のトリレンマ」『アジアレビュー』18 号 (めこん社 2016) p.62。

47 『進撃の巨人』公式 HP、http://shingeki.net/。2016 年 2 月 28 日検索。

48 『このマンガがすごい! 2011』(講談社 2010 年)。

49 趙章恩「日本のアニメ『進撃の巨人』を巡って韓国で話題沸騰」『日経ビジネス ONLINE』2013 年 6 月 6 日。http://business.nikkeibp.co.jp/article/world/20130604/249112/。2016 年 1 月 28 日検索。

50 内山清行『韓国葛藤の先進国』(日本経済新聞出版社 2013) p.18。

51 同上書、pp.20-24。

52 「団地警備員に「ご苦労さま」と声をかけてもらえませんか」『ハンギョレ新聞』(2014 年 11 月 9 日) http://japan.hani.co.kr/arti/politics/18747.html。2016 年 1 月 28 日検索。

53 「富の相続による不平等が韓国で拡大」『ハンギョレ新聞』(2015 年 10 月 30 日)

http://japan.hani.co.kr/arti/economy/22366.html。2016 年 11 月 23 日検索。

54 土堤内 昭雄「「子供の貧困対策に関する大綱」を読んでー“少子化社会のユニバーサルデザイン”として」『ニッセイ基礎研究コラム』、http://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=41871。2016 年 2 月 26 日検索。

55 GANTZ 集英社公式 HP、http://youngjump.jp/manga/gantz/。2016 年 2 月 26 日検索。

56 『GANTZ: PERFECT ANSWER』、チケットがわずか 1 分 56 秒で完売! プチヨン国際ファンタスティック映画祭にて上映決定『シネマトゥデイ』2011 年 7 月 1 日、http://www.cinematoday.jp/page/N0033500。2016 年 2 月 26 日検索。

57 「実写版『ルパン三世』に「花より男子」各国のキャスト集結! ジェリー・イエンら新ビジュアル公開」『シネマトゥデイ』2014 年 7 月 25 日、http://www.cinematoday.jp/page/N0064879。2016 年 2 月 26 日検索。

58 張寅性「東アジア共同体の社会的構成と国際文化」『INTERCULTURAL』10 (日本国際文化学会 2012) p.32。